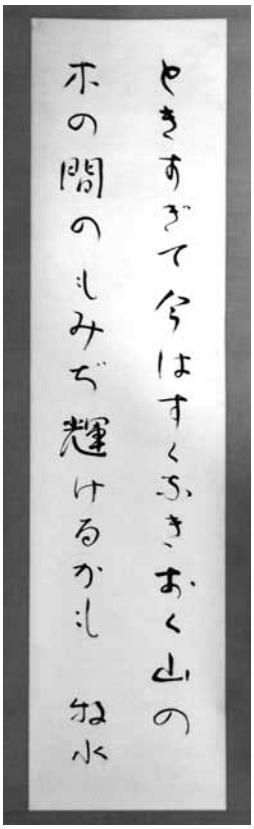
沼津市若山牧水記念館

第51号　平成25年9月15日
編集・発行　公益社団法人 沼津牧水会　TEL･FAX 055-962-0424
〒410-0849　沼津市千本郷林1907-11　http://web.thn.jp/bokusui/



ときすぎて今はすくなきおく山の
木の間のもみぢ輝けるかも　牧水

第十三歌集『くろ土』所収の「愛鷹登山」十八首の中の一首で、「十一月十五日愛鷹山に登る、中腹以上は広大なる御料林にて古木枝を交へ相連れり。」の詞書がある。歌集では「輝けるかも」が「輝けるかな」となっている。

大正九年八月十五日、一家をあげて沼津の「香貫の家」に移住した牧水は、引越し直後ひと月ほどは疲労で作歌もままならなかったが、秋が深まるにつれて旅心が動いてきて富士山周辺を歩いている。十月九日から十一日まで、御殿場～裾野大野原～大宮町（現 富士宮市）の旅をし、また、十一月十五日には愛鷹山へ登った。これは、その時の歌である。

昨年十一月に刊行した『牧水 富士山』に収録の「四辺の山より富士を仰ぐ記」（『樹木とその葉』所収）にその時の登山について次のように書いている。

朝晩に見る愛鷹を越えての富士の山の眺めは、これは一つ愛鷹のてつぺんに登つて其処から富士に対して立つたならばどんなにか壮観であらうといふ空想を生むに至つた。…（略）…山の中腹以上にある森の紅葉がはつきりと我等の里から見える様になると、もうとても我慢が出来なくなり、…（略）…或る晴れた日にその頂上をさして家を出た。…（略）

愛鷹山は謂はば富士の裾野の一部にによつきりと隆起した瘤の様なもので、山の六七合目から上は急峻な山嶽の形をなしてゐるが、それより下は一帯の富士の裾野と同じく極めてなだらかな、そして極めて細かな襞の多い、軽い傾斜の野原となつてゐるのである。で、こちらから望んだ丈では地図の示す通りの海抜四千四五百尺の普通の山であるが、サテ実際に登りかけて見ると今言つた通り、こちらからは一寸見に解らないだらしのない野原をいつまでもいつまでも歩いてゆかねばならなかつたのだ。…（略）

辛うじて頂上に出た。案の如く富士山とぴつたり向ひ合つて立つことが出来た。然し、最初考へたが如く、一糸掩はぬ富士の全山を其処から見ると云ふことは不能であつた。…（略）

真裸体の富士山を見ようといふねがひは前の愛鷹山で見ごとに失敗した。然し、何処かでさうした富士を見ることが出来るであらうといふ心はなかなかに消えなかつた。そして寧ろ偶然に足柄と箱根との中間にある乙女峠を越えようとしてその願ひを果したのであつた。

この半切は大古田厚氏のご遺族から寄贈された。大古田氏は、沼津市議会議長だった兄山本清氏が創業した山本被服の専務で、本会の設立に尽力された方である。（須永秀生）

旅の名人

池内紀

牧水には気ままな旅の歌人といったイメージがある。「幾山河」を足の向くままに旅してまわった。自分でもそんなふうに歌っている。

たしかによく旅をしたが、「気まま」ではなかっただろう。出かけるにあたり、入念に旅程を立て、乗り物は時刻表で調べておく。ふところにはいつも、くわしい地図をたずさえていた。珍しく詩の形をとったなかで当人が述べている。(「枯野の旅」)

枯草に腰をおろして
取り出す参謀本部
五万分の一の地図

旅姿（大正11年10月末　中禅寺湖湖畔）

当時、日本の国土はすべて軍の管轄下にあり、地図もまた参謀本部から出されていた。歩いていてコースに疑念が生じると、すぐさま五万分の一でたしかめた。

路は一つ
間違へる事は無き筈
磁石さへよき方をさす

磁石もちゃんと用意していた。電話、タクシーなどままならない時代であって、途中で往き暮れると、ひどい目にあう。なるほど、旅の途中で牧水は急に予定を変えたりしているが、予定はあくまで机上のプランにすぎず、現実に直面して机上のプランが合わないとわかると、即座に変更したまでである。むしろこの旅行者が、いかに鋭敏な現実感覚をそなえていたかを告げているだろう。そもそも「気まま」と思われるほど自由に予定を変えることができたのは、日ごろからそれとなく準備して、地形その他を頭に入れ、たえずいざというときの心づもりをしていたからではなかろうか。

牧水の年譜などには、「奈智に遊ぶ」「千曲川上流に遊ぶ」といったふうにしるされている。昔の文人旅をいうときの作法であって、実際は「遊ぶ」などとは、ほど遠かったことは、紀行記そのものが示している。千曲川の上流部に入りこみ、源流をたずねたしだいは「木枯紀行」に語られているが、水源にあたる十文字峠は「上下七里の間、一軒の人家も見ず。ただ間断なくうち続いた針葉樹林の間」であって、ひとたび入ったからには、どこまでも歩き続けるしかない。そんな広漠とした原野のなかで大風を体験した。牧水によると大原野にしか見られない、とてつもない強風だった。「木枯紀行」などとあって、俳味をおびた風雅な旅のように受けとられるが、実のところ「木枯」の言葉どおり、身も心も凍りつくような旅だった。

写真に牧水の旅姿がのこされている。スケジュールの長短によって多少は変ったようだが、ほぼ定番のスタイルだったようで、大きめの帽子にマント、着物を尻っぱしょりにして、足は脚絆に草鞋ばき。ふところに手帳、手に洋傘。荷物はいっさいを「合財袋」につめて一つきり。

旅姿（大正11年冬　千本松原にて）

最後の旅姿（昭和３年５月　千本松原にて）

防寒用だが、草地にすわったり寝ころぶときの敷き物に使える。旅でも和服を通したのは幼いときから着なれていたせいだろうが、べつの意味もあったと思われる。牧水が好んで出かけたのは、おおかたが山深いところで、大正年間のそのころ、たいていの人は着物が日常着だった。洋服はせいぜい官吏か、訪れてきた都会人にかぎられた。ことさらめだったり、警戒されてはならないのだ。さもないと快適な旅ができない。着物だと、すぐさまその土地と人にとけこめる。

脚絆と草鞋は古来、日本人が旅のお伴にしてきたものである。加えて牧水の場合、実用的な意味もあった。彼が出向くところではゴム製品や革靴は限られた店にしかなかったが、ワラ製品なら村々のよろず屋の軒にぶら下がっていた。はきつぶせば、すぐに買いかえができたのである。

古風どころか、巧みなコンビネーションであって、昔ながらの着物の一方で、街のモダンボーイが愛用したようなフェルトの帽子やマントを採用している。洋傘は当時、いたって高価な品だったが、これにかぎるのだ。雨以外でもステッキの代わりになる。手のとどかないところのものをつついたり、たたき落としたりできるし、村の野良犬に吠えつかれたら追っぱらえる。護身用の仕込み杖というものだ。牧水のいで立ちからは、きわめて合理的に選びとった旅スタイルが見てとれる。

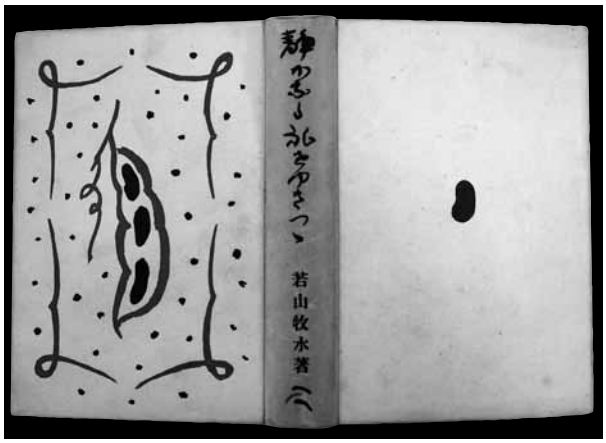
歌人若山牧水が世を去ったのは昭和三年（一九二八）であって、以来八十五年になる。歌はともかく紀行文には、いや応なく時代や風俗が入りこみ、時がたつと急速に古びていくものだ。牧水の同時代には小島烏水や田山花袋が紀行作家として知られていた。ためしに彼らの紀行本をひらくと、直ちにわかるが、おそろしく古くさくて、よほど我慢しないと読みすすめない。

牧水は珍しい例外である。暮らしや風俗、乗り物やコミュニケーションの手段など一切が大きく変化したなかで、その紀行文は少しも古びていない。これといったトピックスをまじえているわけでもないのに、終わりまでたのしく読めるし、著者といっしょに大正期日本の旅ができる。途中で語り手が難儀すると、八十五年後の読者もまたハラハラするし、なんとか夜の宿りにありつくと、わがことの

そんな古風ないで立ちから、あきらかに古い時代の人のように思われがちだが、一つの意思が見てとれるだろう。旅をかさねるなかで工夫して、無駄を省き、もっとも効率的に最少のものを選びとった。大きめの帽子は陽よけ、頭の保護、さらに雨よけになる。マントは

ようにホッとする。

歌人の散文であれば文中に歌がまじってくる。興がのると十首、二十首とつくった。それが平然と割りこんでくる。読者はうるさいと思えばとばしてもいい。作者もまた、そんなかね合いで割りこませた。いっぽうであきらかに歌をつくったはずなのに、一首も入れなかったこともある。「旅のこころ」の中断を恐れたせいであって、歌よりも旅情の継続を重んじたケースである。



「吾妻の渓より六里が原へ」「渓より渓へ」が収められている
『静かなる旅をゆきつつ』（アルス 大正10年7月15日刊）

どうやら人間には二つの類型があるらしい。一つは生まれたところ、暮らしの場で自足して、わざわざよそへ行きたいなどとは少しも思わないタイプである。もう一つは、つねにどこか遠くへ行きたいと念じていて、おりあれば、しゃにむに出かけていく。牧水はあきらかに後者であって、生涯にわたり、旅への思いを断ち切れなかった。

さらに自分では意識していなかったかもしれないが、牧水は旅の書き方をよく心得ていた。気どりのない、素直な、自由な散文である。それはやさしいようで難しい。というのは旅の体験は微妙なバランスの上に成り立っているからだ。旅行は非日常の時間と空間の中へ出かけていく。そんなとき人間の感情や感覚も、ふだんとはちがった起伏と変化を見せるものだ。誰にも覚えがあるはずだが、日常とは異なる場にいると、感覚が鋭くなる。目はこまかく見て、耳は敏感に聴きつけ、何げなく話しかけてくる人の表情まで気になってくる。

そのような旅中の状態をどうやって書きとめるか。気どっていえば「旅のエクリチュール」であって、牧水はそれをみごとに身につけていた。習練ののちというよりも、本能的といっていいほど自由自在に使いこなした。彼の紀行文にはどのように短いものであれ、旅する人間の生理と感情がまさしくその人の原寸大のスケールで書きとめてある。

群馬県の吾妻（あがつま）渓谷の奥山をめざしたときのことだが、店一つとしてなく、午後おそくようやく「まんぢゆう」の看板を目にとめた。ホッとして声をかけると、すでに売り切れ。つづくくだり。（「吾妻の渓より六里が原へ」）

「私は四辺（あたり）を見廻しながら鶏卵はないかと尋ねた」

小島烏水や田山花袋では、決して出くわさない行動だろう。「四辺を見廻しながら」は、放し飼いのニワトリをさがしてのことにちがいない。商品は売り切れてなくなっても、ニワトリは毎日のように卵を生む。鶏卵は現在でいうスタミナドリンクであって、その場で呑みほせて栄養満点。何よりもニワトリの有無をたしかめるところに、体験で学んだ人の姿が見てとれる。

往きくれた姿を見かねてか、老夫婦が食べのこしと酒を少々わけてくれた。いろりにあたっていると、土地の小学校の代用教員をしている息子が帰ってくる。一里ほどある停車場への道のりを考え、牧水がお礼の小銭をの

こして行きかかると、やにわに息子がその小銭を握って投げつけてきた。

「こんなもの、僕の家には貰わないから！」

怒りのあまり声がふるえている。牧水は深く詫びてから小銭をひろいあつめ、そっと石垣の上に置いて立ち去った。歩きながら、なぜ青年が怒ったのかを考えた。「代用教員」は当時、旧制中学で学んだ者が、臨時職員として小学校で教えていた。勉学の希望があるのに貧しさのため上級校にすすめない。スズメの涙のような薄給と、将来の見通しの立たないなかで、毎日教壇に立っている。

「少年の頃の自分自身を見るような心が起って、そぞろに涙ぐましい思いがして来た」

小銭を投げつけられた屈辱のなかで、記憶の底に埋もれていた自分と出くわした。それができるのも旅という非日常があってのこと。それが思いがけない発見の手助けをしてくれる。

「桜の咲こうという季節に、実に根気よく今年は雨が降り続いた」（「渓より渓へ」）

「根気よく」の一語に、長雨にウンザリしていた日々が読みとれる。「雨に飽き果てた末」ともあって、ともかく出かけることにした。さしあたりの予定では、埼玉県熊谷駅を起点にして、秩父鉄道で寄居（よりい）から秩父、そのあと奥武蔵の飯能へ出る。二泊三日、牧水の旅のうちでは、ごくささやかな部類に入る。

熊谷駅に来てみると、秩父鉄道のダイヤが改正されていて、一時間あまり待たなくてはならない。旅先でよくあること、ふつうは舌打ちなどして鉄道会社を罵ったりするものだが、旅の名人はそんなことはしない。アキの時間を利用して牧水は駅に近い土堤へ出た。桜のツボミがふくらんでいた。前は広い河原で、遠くに上越国境の山々が雪をいただいている。どこかでヒバリが鳴いている。河原では砂を運ぶトロッコがのろのろと動いている。一気に歌ができた。

乗換の汽車を待つとて出でて見つ熊谷土堤（くまがやどて）のつぼみざくらを

以下、七首がつづく。

雨ぐもり重きつぼみの咲くとして紅（あか）らみなびく土堤の桜は

枝のさきわれより低く垂りさがり老木桜の蕾しげきかも

蟻の虫這ひありきをりうす紅（べに）につぼみふふめるさくらの幹を

雨雲の空にのぼりて啼きすます雲雀はしげし晴近からむ

まひ立つと羽づくろひするくごもりの雲雀の声は草むらに聞ゆ

身ふたつに曲げてトロ押す少年の鳥打帽につぼすみれ挿せり

をちかたに澄みて見えたる鉄橋の川下うすく夕づく日させり

歌われるのは、桜、つぼみ、幹に這うアリ、雨雲の残る空とヒバリの啼き声、トロッコを押す少年の鳥打帽。紀行文に歌をまじえるとき、一つの原則を立てていたことが見てとれる。観察にしぼって叙情を入れない。目にしたもの、耳にしたものを五七五七七で描写する。いわば三十一音によるスナップ写真であって、文章だとくだくだしくなるところが、明快な形式のなかに記録されていく。

一日目の宿は宝登山駅（ほどさん）（現・長瀞（ながとろ）駅）近くの料理屋兼旅館だった。宴会などとぶつかるのを恐れたが、幸いにもひっそりした部屋で、障子をあけると木立ちごしに渓流が見える。

風呂に行こうとすると、宿の人に言われた。いまは客が少ないから毎晩は湯を立てない。近所に親類の家があるので、そちらを使ってもらいたい――。

宿屋の小娘のもつ豆提灯で二、三丁のところへ出向き、「白粉くさい湯」につかった。芸者の置屋らしく、茶の間に三味線などが置かれ、女の着物がちらばっていた。そんな経過を、牧水は当然のように書いている。そのころの料理旅館ではよくあることだったのだろう。それなりに旅の風情というもので、それで牧水は書きとめたものと思われる。

二日目の朝の散歩。旅好きにはとりわけうれしい時間である。長瀞は現在もよく知られた観光地で、当時は中国の名所になぞらえ、「秩父の赤壁（せきへき）」「関東の耶馬渓（やばけい）」をキャッチフレーズにしていた。旅びと牧水はきちんと批判する。たかだか少しばかり目をひく程度の景観であって、大げさな言い方は「鉄道経営者たちの方便」にすぎない。コマーシャリズムの産物である。

「何よりうれしいのは此朝の静けさであった。」

旅上手は宣伝などに踊らされず、自分のよろこびを見つけ出す。

終点の秩父駅着。牧水はさらに三峰（みつみね）神社のある辺りまで足をのばすつもりだった。汽車に合わせて三峰行の馬車が待機している。ところが牧水はなぜか乗り込まない。馭者にうながされてもグズグズしていて、つぎに断ってしまう。少しあとになってからだが、この日、三峰山に催しがあって、県知事がやってくることが判明した。

躊躇したのは、正確な旅の感覚を示している。駅前の馬車は、現在でいえば定期バスであって、そのたたずまいは定まっている。駅前に立って牧水は、いつもと何かがちがうと感じたわけだ。ふだんとちがっていて、それは自分には願わしくないことなのだ。県知事御一行などとかち合うと規制ずくめで、夜の泊りすらおぼつかない。即座に予定を変更、駅前の茶店に入った。

「茶店の老人を相手にいろいろ考えた末……」

情報は現地で手に入れるのが一番であって、なかでも老人はくわしい上に、いろいろ裏情報も知っている。牧水は急場でも抜かりなく旅の鉄則を実践している。

老人の話から、新しいコースは思っていたよりも時間がかかるとわかり、急いで弁当と酒と干し柿を買いこんだ。みごとに厳選されているだろう。エネルギー源、旅中のたのしみ、それに保存食の三品である。

予定の三峰は諦めたので荒川の源流域はたどれない。急遽とったのが妻坂峠越えをして飯能に出るコースだが、こちらは名栗川の水源にあたる。「みなかみ」好きの牧水に打ってつけである。慌しいなかでも、ちゃんと目的に即して変更しているのは、当地の地形を暗記するほど知っていたからにちがいない。

「耳につくのは梭（ひ）の音である」

秩父織で知られた土地であって、歩く道すじに機（はた）を織る音が聞こえてきた。「男女声を合せて」ともあるから、単調な仕事中に、歌合わせのようなことをしていたのだろう。八十余年前の日本がそなえていた豊かさであって、生活は貧しくても確固とした暮らしのスタイルと詩情があった。旅のたのしみは、無名の人々のなかにひそんだ宝ものを見つけ出すことなのだ。

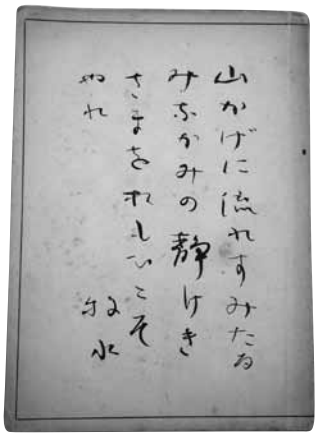
奥武蔵に出る峠道はいくつかあるなかで、なぜ妻坂峠を選んだのか？　標高八三九メートル、けっこうな難路である。どうしてこの峠にしたのか、理由は書かれていないが、しかしながら帰宅直後の一行が、当人の意識して

いなかった真の理由を告げているようだ。

「労れ切って帰った身に、妻の顔が明るく映った」

つまるところ、「妻坂」の地名が無意識にはたらいていた。地形以上に言葉の力がコースを選定した。生来の歌びとらしく言霊の加護を受けていた。牧水の紀行文のついぞ古びない、いま一つの理由である。

牧水の紀行記のなかでもっとも長文の「みなかみ紀行」は、当時の歌人の旅の模様を手にとるように伝えてくれる。まず歌会という用向きがあって、それを終えたあと、かねて目星をつけていたところへ足をのばす。先に触れたように、牧水はみなかみ＝川の源流が好きだった。いくつもの峠をこえて行きつくところであって、水源に近づくと、「胸の苦しくなるような歓び」を覚えたというから、ただごとではない。



『みなかみ紀行』
（書房マウンテン　大正13年７月１日刊）

大正十一年（一九二二）十月、佐久の歌会をすませたあと、牧水は利根川の水源をめざした。四年前に一度試みたが、そのときは十一月半ばのことで、清水越の手前で雪のために涙をのんだ。このたびは時期を早め、佐久から沓掛、嬬恋、草津温泉、暮坂峠をこえて沢渡、四万、さらに沼田、法師温泉、老神、丸沼、菅沼へとたどる長旅だった。歌仲間には私的なネットワークがあったし、歌誌の消息欄に歌会のあとの予定がしるされている。法師温泉に泊った夜のことだが、牧水の居どころを嗅ぎつけた二人が一升壜を下げてやってきた。そのときの経過が興味深い。一人は牧水の最新歌集『くろ土』をたずさえており、ガラリと障子をひきあけるなり、牧水と歌集の扉の写真とをかわるがわる見くらべた。

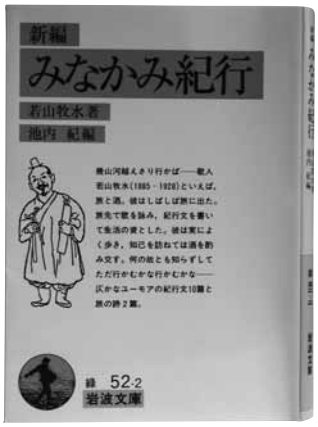
『みなかみ紀行』
（崙書房　昭和46年９月20日刊）

「やはり本物に違いはありませんねエ」

映像が乏しい時代であって、おおかたの場合、名のみ知っているだけ。それを利用してニセモノが徘徊していたらしいのだ。歌人ナニガシと名のって居候をきめこみ、無銭飲食兼旅の駄賃を巻きあげていく。扉についた「著者近影」はホンモノを識別する身分証明書の役まわりをおびていた。

ほかにも牧水の自由闊達な歌と散文がいろいろのことを教えてくれる。たとえ温泉を巡り歩く旅でも、わびしく、きびしいものだった。

山かげの温泉の小屋の破れたれば落葉散り浮くそのぬるき湯に



『新編 みなかみ紀行』
（岩波文庫　平成14年３月15日刊）

現在のように加熱したり冷やしたりは、ほとんど不可能で、湧き出たままがふつうだった。そして自然界の湯水は、べつに人間の好みに合わせて出てきたりはしないのだ。また名の通った温泉地でも、内湯は少なく、外湯に出かけていく。先まわりして女たちが野菜を洗っていたりした。

菜をあらふと村のをみな子ことごとく寄り来てあらふ此処の温泉(いでゆ)に

「壁もなければ」の注記からわかるのだが、四本柱に屋根だけの湯小屋で、電気もなく、ただ一面の闇の中。

あばら屋のおそろしければ提灯(ちやうちん)をともしてぞ入る夜半(よは)のいで湯に

花敷温泉の宿に入って湯をたずねると、川向こうの山かげといわれた。行ってみると河原に穴が掘ってあって、ただそれだけ。すぐわきを渓流が勢いよく流れていく。

折からや風吹きたちてはらはらと紅葉は散り来(く)いで湯のなかに

歌人を粗末にしてはいけない。どんなに服装が見すぼらしくても丁寧に扱わないと、あとでホゾを噛む。「みなかみ紀行」にいう四万温泉が二つとないサンプルである。

花敷、沢渡を経由して、夕方、四万温泉に着いた。歌仲間が一人同行しており、二人して宿を乞うた。現在も四万で聞こえた大旅館である。歌会後、牧水は一週間ちかく旅をつづけてきて、見るからにくたびれた格好をしていた。しかも一泊だけ。宿の者はチラリと見て大部屋に通した。なんともむさくるしい部屋で、間仕切りの唐紙もろくになく、畳、火鉢、座ぶとん、すべてが使い古し。夕の膳を運んできた小僧は、そばにすわったきり動かない。

「代金を頂きます。」

見すぼらしい身なりから払いを警戒したらしく、夕食は宿が勝手に店屋物にしていた。

翌朝、出かけるとなっても、ひとりとして見送りに来ない。牧水はいつも、少しばかり心づけを置いていくことにしていたが、とてもそんな気持にならない。

「斯(こ)うまでも挑戦状態で出て来られると、そういう事をしている心の余裕がなかった」

四万温泉の大旅館は惜しいことをしたものだ。ちょっとした商売気から天下の大歌人をとり逃がした。さもなければリチギ者の牧水であって、きちんと宿のことを述べ、歌の一つも詠んでいたかもしれない。とすれば誇らかに「牧水のお宿」を看板に揚げ、手拭いに染めつけることもできたのである。それはいかなるPRにもまして効果的に、宿の宣伝をしてくれるはずなのだ。

付記　沼津市若山牧水記念館における講演（平成二十五年五月二十五日）にもとづき、そこに加筆・再構成をほどこした

［筆者プロフィール］いけうち　おさむ

ドイツ文学者、エッセイスト。昭和十五年姫路市生れ。平成五年三月まで東京大学教授をつとめる。主な著訳書に、『ウィーンの世紀末』、『海山のあいだ』（講談社エッセイ賞）、『ゲーテさん こんばんは』（桑原武夫学芸賞）、『カフカ小説全集』、『恩地孝四郎 一つの伝記』（読売文学賞）、シリーズ『池内紀の仕事場』など。

平成十四年『新編 みなかみ紀行』（岩波文庫）の編集取材で本記念館においでいただいたのが縁で、平成十五年の会報「幾山河」に、「記録者の目」をご寄稿くださり、同年秋開催の第一回沼津文学祭の基調講演「牧水は何を見たか」で、牧水について語られた。平成二十一年度の文化講座で「太宰文学のおかしさ～不器用に生きた天成の語り部～」の講演をしていただき、このたび、文化講座の講師として、牧水について語っていただいた。本会会員。

牧水とエコロジー

曽根耕一

はじめに、女流歌人栗木京子氏が本会「館報」第三十五号に寄せられた〝「こころ」を見つめた牧水〟と題する一文を、参考資料になろうかと再読させていただいた。

こうして牧水の詠んだ「こころ」の歌、「いのち」の歌、「われ」の歌を読み直してみると、いつしか心が癒されてくるのを感じる。私自身も含めて現代人はさまざまなストレスに晒され、心身のバランスを崩しがちである。そんなとき牧水の数々の作品（今回の拙稿では言及しなかったが短歌のみならず紀行文等も含めて）を静かに読み返してみたいと思う。そして、悩みをかかえている人たちにも勧めたいと思う。牧水は日の当たる場所を能天気に歩いてきた人物ではない。人一倍傷付き、悲しみ、絶望し、そのぶん人一倍純粋に生きた人だった。そんな牧水の人生をあらためて思い返している。

栗木氏は一文の結びをこのように述べている。ここには栗木氏の牧水認識が集約されており、牧水を語り愛好する人達にとって大事なヒントを与えている。

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の国を旅ゆく　『別　離』

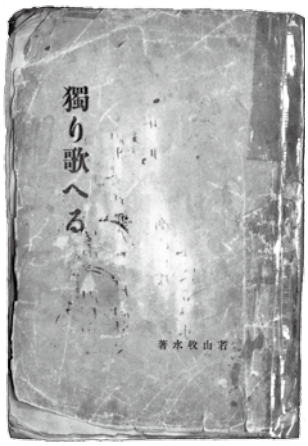
幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく　『海の声』

山越えて空わたりゆく遠鳴の風ある日なり山ざくら花　『海の声』

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな　『路　上』

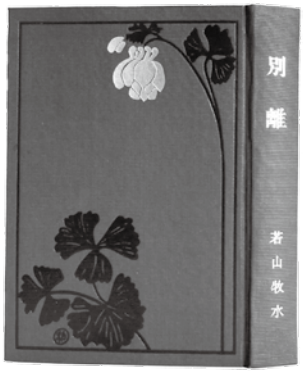
牧水の青春歌といえば、誰もが口にする愛唱歌の中で、私の心に居座り、先ずは口にする歌たちである。自然の空と海と大地をこのような青春叙情歌に詠い上げた歌人は、未だ牧水を措いて他になく、魅了して止まないのである。

伊藤一彦氏は『若山牧水歌集』（岩波文庫）の解説で、牧水の十五の歌集を青年期と壮年期に分け、それぞれを前後期に分けて四期に区分している。『海の声』『独り歌へる』『別離』『路上』が二十二歳から二十七歳までの第一期の青年前期、『死か芸術か』『みなかみ』が二十七歳から二十九歳までの第二期の青年後期の作品である。また、『秋風の歌』『砂丘』『朝の歌』『白梅集』『さびしき樹木』『渓谷集』が二十九歳から三十四歳までの第三期の壮年前期、三十四歳から没年までの『くろ土』『山桜の歌』『黒松』が第四期の壮年後期の作品であるとしている。この区分に基づいて、論を進める。

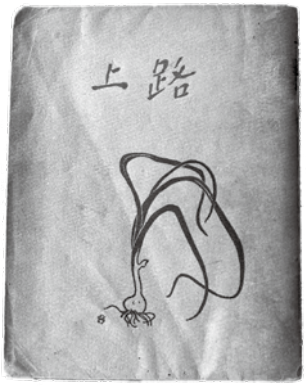


第２歌集『独り歌へる』
（八少女会　明治43年１月１日刊）

第１歌集『海の声』
（生命社　明治41年７月18日刊）



第３歌集『別　離』
（東雲堂 明治43年４月15日刊）



第４歌集『路　上』
（博信堂 明治44年９月12日刊）

牧水の青春歌集は、二十二歳から二十九歳までの八年間の作品であり、第一期の『海の声』『独り歌へる』が集約された『別離』によって、対象化された近代的な恋愛感情が大きな反響を呼び、『路上』ではその自我意識の苦悶（悲恋）と寂寥がうたわれ、新雑誌『創作』の創刊と併せて一躍、新時代を風靡する青年歌人牧水の誕生になる。

しかし、悲恋の苦しみと実生活の苦悩を抱えたまま、自然主義的影響を受けた第二期の『死か芸術か』『みなかみ』は、かなり退廃的な破調作品で、青春と決別する。私の目を止める次のような歌がある。

手を切れ、双脚を切れ、野のつちに投げ棄てておけ、秋と親しまむ　『死か芸術か』

なにゆゑに旅に出づるや、なにゆゑに旅に出づるや、何故に旅に　『死か芸術か』

浪、浪、浪、沖に居る浪、岸の浪、やよ待てわれも山降りて行かむ　『死か芸術か』

うら若き越後生れのおいらんの冷たき肌を愛づる朝かな　『死か芸術か』

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきて居り　『みなかみ』

納戸の隅に折から一挺の大鎌あり、汝が意志をまぐるなといふが如くに　『みなかみ』

先ずは『死か芸術か』の歌材の変り様を示す一首・二首・三首の歌だが、句読点の多用で破調を決め、これにより悲恋の過去と決別して、立ち直ろうとする思索的意欲は伺えるが、自虐的な苦悩をここでも旅と自然に語りかけて止まない。四首目の「うら若き」は放蕩の歌であり、この頃の牧水は、『創作』を止め、新たに『自然社』を起こす計画があったが、実務的な資金の目安が立たない苦悶を抱えたまま信州の旅に向かい、桔梗ヶ原で喜志子に出会うまでは、かなりの遊女遊びをしたとある。

五首目は、『みなかみ』の巻頭の歌で、これも愛唱される歌である。牧水は父危篤の知らせ受けて急ぎ郷里坪谷村に帰り、故郷の尾鈴の山にしみじみと向かい合う。この「かなしさよ」の調べに六首目の歌が重なる。六首目の歌の破調は、前歌集『死か芸術か』の退廃を克服すべき決意の見える哀愁歌といえよう。

牧水の歌はこの『みなかみ』の破調でその青春を区切り、次の壮年期を用意するが、牧水の青春歌に「かなし」「さびし」「なつかし」が多用されているのは、誰しも気付くことで、その詠嘆の対象が、先に述べた自然の空と海と大地であることの意味合いについて、何故そうなのかを、私なりに確認をしておきたい。

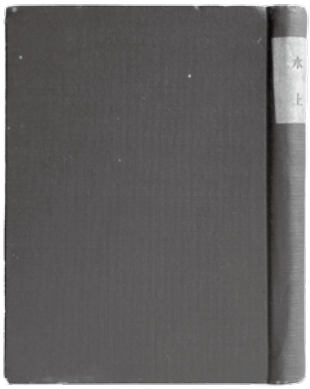
幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

この歌については、ドイツの詩人カール・ブッセの詩（『海潮音』上田敏訳）の「山のあな

たの空遠く」が重なり、他の自然詠には、国木田独歩やイギリス詩人・ワーズワースの自然詩の影響が一般的に語られており、私もそれを否定しないが、草壁焔太著『啄木と牧水』（日貿出版社刊）の以下の一文は、私の視点を補ってくれる史料で、説得力がある。一部を紹介する。

牧水絶唱の「幾山河」「白鳥の」はいずれも、「寂しさ」「哀し」の代表作なのだが、

第５歌集『死か芸術か』
（東雲堂　大正元年９月23日刊）



第６歌集『みなかみ』
（籾山書店　大正２年９月10日刊）

この二つの心情が、牧水にあっては本性的、本来的なものであったことが、いままであまり指摘されていないことはふしぎである。この「哀し」「寂しさ」は流行的なものでもなく、古典的な「哀し」「寂し」とも異なっている。つまりこれが牧水の個性であって、それゆえに、「哀し」「寂し」という語を使わぬ歌のなかにも、切々たる哀しさ、寂しさが、牧水の場合には息づいているのである。私は明治期三十年代以降の歌は、万葉集をはるかに超えていると総合的に判断するが、その第一にあげたいのは、牧水の哀韻と歌の複雑にして流麗な構造である。またそこに秘められた美学である。これは晶子の歌よりも高度なものである。定家の美しさをもっていてしかも、頭を使わずにわかる最高級の歌なのである。第二にあげるのが、啄木の凄絶な意識力とそれに基づく批判精神からのため息として生まれた歌であり、つぎには吉井勇の初期の優艶な歌である。晶子の歌はまた別種の高さをもっているが、それは人間的な力、人間としての凄みからくるもので、その意味ではちょうど啄木の位置におくべきであろう。

牧水には人間的な面白みは、啄木や晶子ほどにはないかもしれぬが、その歌だけは天性的な哀しみと寂しみ、高度なエーステティクを含んだもので、しかも一般の読者にも、専門家にも等しく理解されるよさをもっている。啄木や晶子は天才的な人間であるが、天才歌人というならば、私はまず牧水をあげたい。牧水は生まれついてのコオロギである。

そして、その天才のリズムとメロディーの謎を解く鍵は、孤独癖、自然探索癖に見られる、どうにもならぬ内向的感情にある。それは牧水の歌のまるで泉から湧いて尽きず渓谷を流れてゆく水流のような調子そのものの感情であったに相違ない。…（略）…牧水の内面生活というのは、自然物のあいだにはいって、自然物をみつめることによってしか慰めを得られないものであった。

牧水の歌は、詠嘆の美学だと言い、天才歌人をいうなら啄木より先ず牧水を挙げており、その孤独性は自然と向き合うことによってのみ癒しが得られたのだという。

以上、私の牧水青春歌の確認はここまでだが、この時期の牧水が北原白秋の紹介で啄木

と出会い、どちらも平易な親しみやすい庶民感覚で詠い挙げた詠嘆の調べは、明治末期に光彩を放ち合った。牧水と啄木の二人について、作品の資質の違いを、自己表現の違いとして、単純に仕分けたものか、ここは思考の求められるところである。

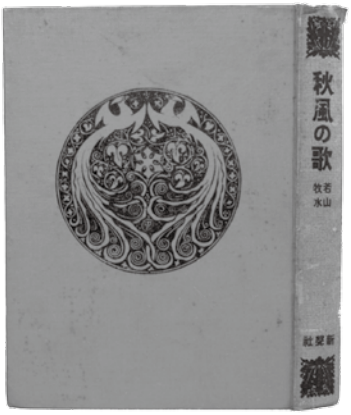
牧水の啄木との出会いを考える時、その時代背景の語りが通り一遍であり、例えば、

虚無党の一死刑囚死ぬきはにわれの『別離』を読みゐしときく

この歌を挙げて牧水を語る人は少なく、記事を目にすることのない中で、玉城徹氏だけが『若山牧水随筆集』（講談社文芸文庫）の「解説」で若干触れている。

ことわるまでもなく、大逆事件の死刑囚であるが、その一人は、誰だったろう。そして、牧水に伝えたのは、誰だったのか。一死刑囚は、牧水の顔見知りだったのか、どうか。

事実の詮索はとにかく、そこに、一脈の精神的親密さが存在したことは確かである。明治政府が怖れて、一挙に撲滅を計ったのは、この親密さの広がりであったろう。



第７歌集『秋風の歌』
（新声社 大正３年４月13日刊）

玉城氏の洞察はさすがである。氏も平成二十二年に他界されたが、戦時の思想・言論弾圧の体験者として次のようにも述べる。

透谷も、独歩も、啄木も、孤独な絶望のうちに寂しく死んでいった。もはや、このタイプの知識人の生きてゆく余地は、この日本にはないのではあるまいか。「この日本」とは、西欧列強を模倣して、〈帝国〉に伸し上がろうとする日本である。大逆事件裁判も、今や、この文脈によって読み直されなければならない。それは、単なる社会主義弾圧などというものではなく、「自己の生」をまじめに考える、自由な「知」すべてに対する断罪であった。

そのことを、誰よりも痛切に感じとったのは、啄木であった。牧水は、それを言わんとして、言い得なかったのである。

玉城氏のこのような一文を頭に置きながら、第三期の壮年前期の歌に触れて見よう。

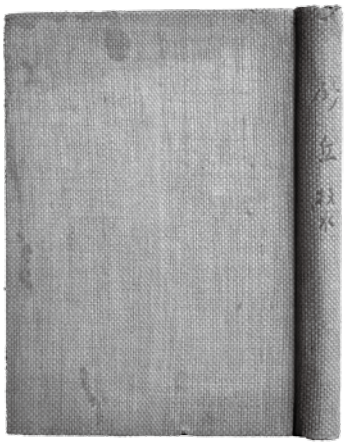
妻はしたにわれは二階にむきむきにちさき窓あけくもり日に居る　『秋風の歌』

郊外や見まじきものに行き逢ひぬ秋の欅を伐りたふし居り　『秋風の歌』

くつきりと秋のダリアの咲きたるに倦める心は怯えむとする　『秋風の歌』

朝霧は空にのぼりてたなびきつ真青き峡間ひとりこそ行け　『砂　丘』

時をおき老樹の雫おつるごと静けき酒は朝にこそあれ　『砂　丘』



第８歌集『砂　丘』
（博信堂 大正４年10月15日刊）

貧しさを嘆くこころも年年に移らふものか枇杷咲きにけり　『朝の歌』

酒飲めばこころは晴れつたちまちにかなしみ来り畏みて飲む　『朝の歌』

やと握るその手この手のいづれみな大きからぬなき青森人よ　『朝の歌』

めづらしく妻をいとしく子をいとしくおもはるる日の昼顔の花　『白梅集』

ほがらかに晴れゆく夏の朝空のいよよ深みてひとのこひしき　『白梅集』

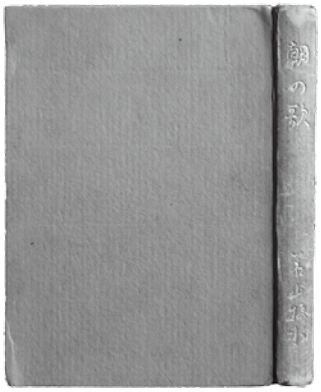
雀啼くなんといふそのたのしげのほしいままなる啼声かいま　『さびしき樹木』

石越ゆる水のまろみを眺めつつこころかなしも秋の渓間に　『渓谷集』

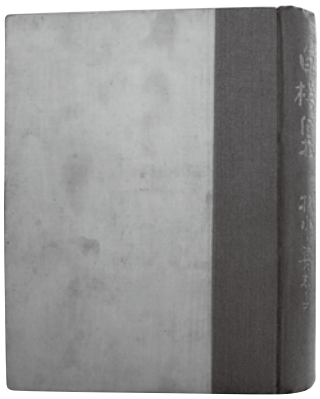
年表に見る牧水は、大正二年決意を新たにして上京し妻子との生活を始めたが、『秋風の歌』に見られるような倦怠と無気力な表白が、先ずは目立つ、（自序の中では本人自身それを認めている）抜書きした三首はそれぞれの題名を背負っており、（一首目は「夏の日の苦悩」二首目は「秋日小情」三首目は「秋風の歌」）これについて『若山牧水歌集』を解説する伊藤一彦氏は、「新しい自己を確立したい思いはあるのにそれができないでいる苦悩が根底にあった。」と（『白梅集』まで）指摘するが、そこで私はその苦悩についてもうすこし立ち入ってみたい。（玉城氏の指摘の啄木との関係においてである。）

牧水は『みなかみ』の自序にも、

この変化に就いて自ら多少の説明を加へたい心地もするが、今はまだその時でないと思ふ。そして此等の作の価値はとにかく、斯くの如き傾向の生じたことは、私の歌の歴史にとり強ち無意味のことで無いと私は自ら信じてゐる。尚ほこの事に関しては広く一般の批評意見を聴きたいものと望んでゐる。私の心中に斯ういふ変化の起りかけてゐたのは決して昨今のことではなかつた。・・・



第９歌集『朝の歌』
（天弓堂　大正５年６月22日刊）



第10歌集『白梅集』
（抒情詩社　大正６年８月５日刊）

第11歌集『さびしき樹木』
（南光書院　大正７年７月23日刊）

第12歌集『渓谷集』
（東雲堂　大正７年５月５日刊）

と述べている。これも含みのある言葉遣いであり、今はその時期でないと言うのは、啄木の出会いと、その死を意識せずには、自らの作風変化を語れない。（語るには啄木の社会思想と、その時代背景に触れることになる）牧水には、言い得なかったことになろう。

牧水は、『みなかみ』で、啄木は啄木であり、牧水は牧水であるわが道の自立を、意図的で無く極く自然に郷里の坪谷の自然から学びとりはしたが、啄木を本音で語れない苦悩を抱えてのまま、『秋風の歌』のようになったのだと、私は思いたい。

しかし、次の『砂丘』から『朝の歌』『白梅集』には風景や自然が日常生活の中で歌われ、壮年を迎えた家庭人として歌に清澄さが増し、酒の歌もしみじみとした歌になる。『白梅集』は妻喜志子と共著になっており、喜志子との暮らしぶりの微笑ましさも伺える。

そして、この頃より牧水はより旅をして、その自然のなかに自分を埋没して詠う清澄さが『さびしき樹木』と『渓谷集』に見られるようになる。

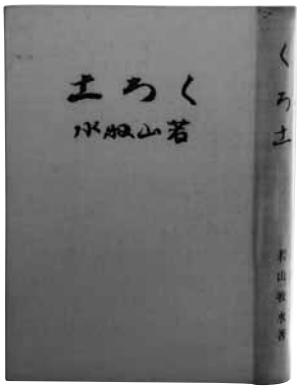
石越ゆる水のまろみを眺めつつこころかなしも秋の渓間に

名歌中の名歌が生まれると同時に、『くろ土』の円熟した歌風の後期作品へ移行して行く。

第四期の壮年後期の歌集は、この『くろ土』から『山桜の歌』までが牧水自身の発行であり、第十五歌集『黒松』は、大正十二年から昭和三年（没年）までの作品が喜志子夫人と高弟大悟法利雄氏の手によって編まれている。

をちこちに啼き移りゆく筒鳥（つつどり）のさびしき声は谷にまよへり　『くろ土』

言葉さへ咽喉（のど）につかへてよういはぬこの酒ずきを酔（ゑ）はせざらめや　『くろ土』



第13歌集『くろ土』
（新潮社　大正10年３月22日刊）

第14歌集『山桜の歌』
（新潮社　大正12年５月17日刊）

五年ごし永きにわたり戦ひしたたかひのむねを明らかにせよ　『くろ土』

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花　『山桜の歌』

野末（のずゑ）なる三島の町の揚花火（あげはなび）月夜の空に散りて消ゆなり　『山桜の歌』

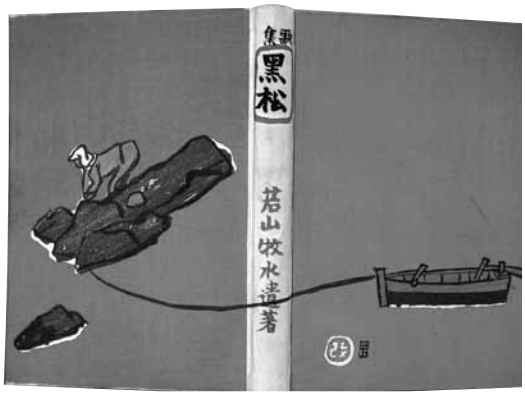
まろく寝てねむれる馬を初めて見きかはゆきものよ眠れる馬は　『黒　松』

身に近き友のたれかれを思ひみつ寂しからぬなし人の生きざま　『黒　松』

足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壜は立ちて待ちをる　『黒　松』

壮年後期歌集の中から、結語を探す私なりの意図で、このような歌に目を止めて見た。『くろ土』は、牧水自身の歌境を示した歌集として評価されており、旅の歌が中心になるが、それは牧水が生涯を極めた本格的な自分探しの旅であり、いうなら寂しさを極めた旅の歌といえよう。採り上げた一首目の筒鳥の歌は、そのまま牧水の旅姿であり、牧水の旅は筒鳥の寂しい鳴き声に同化する。

次の酒の歌もそうだ。酒で妻子に見放された寺男を、自らを重ねた戯れの歌だが、この



第15歌集『黒　松』
（改造社 昭和13年９月13日刊）

ような歌にも牧水の酒には、静かな寂しさが纏う。（「百薬の長」にはならなかった。）

三首目の「五年ごし」の歌は、この『くろ土』には珍しい社会詠である。「五ケ年にわたりし欧州大戦漸く終り、平和を祝ふ歌をと某新聞社より求められしに答へて詠める」の詞書が付された「平和来」と題する七首がそれで、この頃牧水は歌壇の第一人者として、当時のマスコミから平和の祝い歌を求められて答えた歌だが、この一首に込められた牧水の腹の据えように驚く。この歌の後に次の二首が続いている。

たたかひの一途なりしを勝鬨のいまとりどりに乱れたり聞ゆ

たたかひの終れるあとに這ひまはる虫けだものを追ひ払へ神

この二首と併せて読むとき、牧水が初めて見せる大正社会に向けたレジスタンスだと思う。私はこれを、先に述べた『別離』の「虚無党」の歌に触れた玉城氏の言葉

牧水は、それを言わんとして、言い得なかったのである。

の宿題への答えだと思う。

戦ひしたたかひのむねを明らかにせよ

この結句のマスコミへの回答に、当時のマスコミは「牧水」という歌人のこのような期待はずれの歌に度肝を抜かれたかと思うと痛快である。

大正史を見るとこの時期、日露戦争を経た日本は、一途に富国強兵と国家独占資本主義の路線を直に進み始めた時代であり、女工哀史に見られる農村疲弊と今で言う格差社会の形成、治安警察法による言論思想弾圧と大正デモクラシーの歪み等のあった時代であった。ことに、この第一次欧州大戦は交戦諸国の軍需により、日本経済は未曾有の好景気を齎した。しかしそれは国家権力を支える一部の財閥コンツェルンと、そのお零れ企業のことで、下層化された多数の国民は生活苦の中で大戦勝利の祝賀を強いられたのだ。

牧水の歌には、時代性やアイロニーに欠けるという批判もあるが、読者側の浅い物言いにすぎない。この歌には牧水のこの時代を生きた豊かな人間性が示されており、この人間性が底辺にあって『くろ土』の堅実な歌風の完成があり、『山桜の歌』の華麗さに読者は誘いこまれるのである。

さて、牧水は『くろ土』の後半期に、富士山を始め身近な自然に恵まれた沼津に転居した結果、千本の住まいを奥津城として『黒松』はその遺歌集になったのだが、この『黒松』について、編者の大悟法氏は『歌人牧水』（桜楓社）で

『黒松』の歌を読んで感ずるのは、作者が年輪を加えたというのか、円熟して来たというのか、実に落ちつき沈潜して来て、一読ぱっと目につく派手なところはないが、それでいて平明の底に何とも言えない滋味を湛えており、読者の心に大きな安らぎを与えることである。

と述べている。私の取り上げた終りの三首は、境涯歌にしてまさにこの評の言う明るい平明さに酔わされる。

以上、私と向き合う「牧水」について、メモ程度の走り書きで、全歌集に触れてその到達点に触れてきたつもりだが、それらを私の結語として括ると、どういうことになろうか。

先ずはその前期歌集の総括は『みなかみ』までになるが、牧水歌の「寂し」「哀し」について、生まれ持った内向的感情による、孤独的な性格と位置づけただけで良いのかということになる。私はこの一般的理解を『別離』『路上』にまでは容認できるが、『死か芸術か』『みなかみ』になると、啄木との出会いにおいて、牧水もリアルな時代背景を如何にしたものか、理性的な覚醒を求められたのではないかと思う。牧水と啄木の出会いは、牧水の生まれ持った寂寥感性と啄木の天才的な時代感性との出会であった。そこで二人が影響し合うことは当然であったが、ライバル意識を持つ間もなく啄木は夭折し、牧水は戸惑いを抱えたまま、加えて実父の死にも遭遇する。牧水の『別離』『路上』までは、その寂寥感は自然という空間に癒しの場を求めてやまないものであり、それを憧れというなら、『死か芸術か』『みなかみ』の感性は啄木から背負わされた時代感覚の苦悩といえよう。だが、啄木の時代感覚の短絡に気付いた牧水は、啄木の対極となるべく自然認識を『みなかみ』では理性的な存在として、自立する後期作品を用意する準備期間だったともいえよう。

次に壮年期の『秋風の歌』以降の総括になるが、これまで多く語られている牧水歌集を、これ以上綴る知力がないので、結語として、この稿の題名のエコロジーについて述べてみたい。

「牧水とエコロジー」こんな題名を使用するのは、多分私が初めてかな？と思いながら稿を進めていたところ、手元に届いた『短歌研究』八月号の表紙に「若山牧水再読・特別対談・池内紀vs伊藤一彦」の大変なタイトルに出会った。

目を通すうちに、牧水の悲しみの「リフレイン」として「沼津千本松原伐採もそうですよね」と語る伊藤一彦氏に、池内紀氏が「あれは本当に日本で最初のエコロジー運動ですよね」と応じている記事が目に入り、驚くと同時にこれだと、わが意を得た思いになった。

エコロジー、生態学という学術用語が、昨今の環境汚染に対処するエコの略語で流行語になっているのだが、牧水の生きた時代には、こんな用語はなかったはずであるのに、牧水の自然認識は、周辺に在る全ての自然を悲しみの共同体として受け入れることであった。

牧水の歌は、この共同体の破壊者を許さず、受け入れなかったのである。私は結びとしてこれを言いたかったのである。

昭和三年九月十七日、若山牧水は、愛した千本松原の自宅で四十三歳で永眠した。当時としても若すぎる一期であったが、険悪な時代を歌一筋に生きた牧水の歌には、今の時代にして、学ぶべきことが多い。歌詠みの一人としても、なにをどう詠うべきかを示唆してくれてやまないからである。

［筆者プロフィール］そね　こういち

大正十五年沼津生れ。本名 杉山重義。東海短歌会代表。本会監事。

本会主催の文化講座の講師として「戦後の短歌と地域の短歌の歩み」（平成十五年十月十二日）、「戦後の短歌について」（平成二十三年十月三十日）の講演をされている。